

パンタナール通信

南北米福地開発協会 会報 2004年10月1日発行 第13号

第五回国際協力青年ボランティア報告
2004年8月24日～9月14日



南北米福地開発協会
第5回 国際協力青年ボランティア隊
2004年8月25日～9月13日 於:パンタナール地域

エスペランサ村中学校建設ボランティア（日本救援衣料センターから贈呈されたユニクロの新しい服を村の子供に届ける）



青年ボランティア隊の活動を振り返って（スタッフ 佐野道准）
『青年ボランティア隊の奉仕活動プロジェクトは二年から始まって今回で5回目になる。今回の奉仕の場所は、パラグアイ川上流のエスペランサという五百名位が住む、小さなインディアの集落で中学一年から三年にあたる教室を三室つくってあげるといふプロジェクトであった。中学までが義務教育であるにもかかわらず今まで村には中学校はなかった。青年達が舟から降りて、その場所に降り立った時、大きなカルチャーショックを感じた。家の殆どが椰子の木で作られた小屋のようなものであること。行き交う人達の粗末な身なり、はだしの子供達も多いこと、車が一台も走ってなく、放し飼いの牛や馬があちろちろちろで、草を食べている。日本では見た事も無い光景だ。小学校の教室の一角にマットを敷いて寝袋で寝る。暑さや蚊との戦いだ。電気も無く（我々が滞在している期間、夕方六時から九時までは特別に発電機を回してくれた。）シャワーは川。日本の快適な文化生活に慣れた日本の青年達がどこまでこういう生活に耐えられるのだろうかと非常に不安に覚えた。スケジュールの方は、午前中は、村の人達や学校の子供達との交流の時間を持った。（文章次のページに続く）

南北米福地開発協会事務局

東京都渋谷区神宮前六一九一四

神宮前ハッピービル十階

〒一五〇〇〇〇一

電話（〇三）五七七四一〇五四四

FAX（〇三）三四〇七〇一四五

写真で見る青年奉仕隊員の活躍



(前のページからの続き)

部族の酋長や長老に会いに行ったり、その人達の生活様式を話してもらったり、狩りの弓を射る方法を教えてもらったり、部族の墓場等を見せてもらったりした。

また、子供達を集めて、簡単な日本語の会話を教えてあげたり、童謡を教えてあげて、一緒に皆で合唱していた。テレビでコメデアンがするようなギャグも披露して皆が真似をし、教室内は大きな歓声と笑いに包まれた。折り紙も皆、興味深かそうに日本の青年達が作る手元を覗き込んでいた。また、ある日は外に出てスポーツをした。サッカー、バレー、ブーメラン等、別な日には全員で野外ゲームをいろいろした。学校の先生もとても乗ってきて運動会のようになってしまう日もあった。

昼からはいよいよ教室建設の奉仕活動。作業は床のコンクリートうち。炎天下の下で、男性はセメント、砂利、砂を運んで来て、分量を量り、水とともにコンクリートミキサーに投げ込む。出来上がったコンクリートを木の枠で囲った床に流し込む。セメント、砂利は一袋五十kg、砂は一袋三十kgの代物。大変な重労働である。

女性の方は舟で港まで運ばれてきたレンガを牛車にのせて、現場まで運んでくる作業をした。港でレンガを牛車に積み、現場でレンガを再び降ろす作業だ。休憩が間にあるとはいえ、夕方5時まで働く汗はダクダク。体はくたくたで埃まみれ!!全員がなりふり構わず川に飛び込んで気持ちよさそうにシャワーを浴びていた。

滞在を終えて、彼らの感想は意外にも全員そろってとても肯定的なものだった。子供達の純粹さ、素直さ。部落の人々の素朴さに全員がとても感動していた。夜空の星の美しさに感動し、自然の中で生活した事も彼らの心の中に忘れたいインパクトを残したようだ。彼らは口々にこの子供達と別れたくないとか、自分はここに生涯残っても良い等とも言っていた。青年達はここでの滞りを通して、人間にとって大切なのは何か、日本では忘れていた何かを再発見したのではないだろうか?ここでの体験が将来、必ず何らかの形で彼らの人生において、役に立つことがある事を確信しつつ・・・。

**パラグアイ全国紙ABC新聞社を表敬訪問（九月十二日）
国際協力青年ボランティアの活動が新聞に掲載される。**

CONSTRUYEN TRES AULAS PARA INDIGENAS CHAMACOCOS

Universitarios japoneses destinan sus vacaciones al servicio social

Lejos de destinar su tiempo libre a la diversión o a otros pasatiempos, un grupo de universitarios japoneses ha decidido llegar al Paraguay a emplear sus vacaciones en beneficio de los necesitados. Los jóvenes han iniciado la construcción de tres aulas en Puerto Esperanza (Chaco) que serán destinadas a los niños indígenas chamacocos.



Los jóvenes japoneses y pobladores de Puerto Esperanza, en plena construcción de las tres aulas.



Tokyo Nishizaki, Shizuyama Katsunori, Kogei Ishida, Keitaro Ishihara, Taka Moriuchi y Takashi Shigenaga, universitarios japoneses, explican en nuestra redacción el trabajo que realizaron en Puerto Esperanza.

Algunos de ellos es la primera vez que contactan con los nativos; otros, sin embargo, este tipo de trabajo con socios más necesitados es una experiencia ya practicada en otros países. En Paraguay, por ejemplo, la presencia data de hace cinco años. En el 2003, el grupo de universitarios prestó sus servicios en Puerto Diana, cerca de Bahía Negra, a 850 kilómetros al norte de Asunción. En esta localidad construyeron una escuela y hoy esta experiencia se repite en Puerto Esperanza, ubicado a unos 600 kilómetros, aguas arriba del río Paraguay. Los jóvenes llegaron a nuestro país a través de la Fundación para el Desarrollo Sustentable en las Américas del Norte y Sur, una organización que promueve el servicio social y la defensa del medio ambiente. Michihito Sano, secretario

el intercambio cultural es muy provechoso para sus compañeros. Los universitarios (25 jóvenes) tuvieron la oportunidad de conocer los costumbres de los nativos, sus formas de vivir, el idioma, al mismo tiempo, los japoneses enseñan su idioma y otros conocimientos en medicina o en relaciones humanas. Un grupo de seis personas retornará en estos días al Japón, para preparar a otros que vendrán para seguir este iniciativa de servicio a los

Los universitarios también se han maravillado con la naturaleza de esta parte del Chaco, considerada como la puerta de entrada al pantanal y que se extiende hacia el norte hasta Corumbá (Brasil). La obra iniciada en Puerto Esperanza, que constituye un aporte a la educación paraguaya, culminará en diciembre; en esa ocasión habrá una inauguración simbólica. Al mismo tiempo se identificará la otra localidad que el año que viene recibirá

記事内容 **日本人大学生が休暇を社会奉仕の為に捧げる。**
自由時間を遊びやその他の娯楽に使うことなく、日本人の大学生グループは自分達の休暇を恵まれない人達の為に使うべく、パラグアイにやって来た。青年達はプエルトエスペランサ（チャコ）においてチャコ族のために3教室の建設に着手した。

エスペランサ中学校建設支援をしてくださった皆様へ

第五回国際協力青年奉仕隊が八月末、現地に到着、中学校の校舎土台造りを現地の労働者とともにに行い、無事、日本へ九月十四日到着しました。
今後、奉仕隊とともに建設に携わった現地の労働者とレダに滞在する日本人スタッフが継続し、今年十一月までには校舎は完成する事になっています。エスペランサ村小中学校校長始め村人全てが皆様の暖かい支援に感謝しております。本当に有難うございました。

第五回国際協力青年奉仕隊隊員感想文

神元繁守（大学院薬学部一年）

私は青年海外ボランティア隊として南米のパラグアイを訪れ、そしてレダ地区やエスペランサ村での活動を終えようとしている今、大変貴重な経験が出来た事を強く実感しています。
日本を旅立ち長時間の移動を経て、パラグアイのアスンシオン空港に降り立った瞬間から、驚きの連続だった。スーツケースなどの手荷物を、外まで運びチップをもらう人が大勢いた。日本ではありえない光景で国の経済的な状況の違いを痛感した。
そして何よりも驚き、感動したものは、アスンシオンから、レダに向かうバスやポートから飛び込んでくる様々な景色であった。1本の道路でその両側に果てしなく広がるヤシの木などの木々や、牛、馬、鳥など、今まで目にした事のない大自然の光景には、長時間、目を奪われた。

そして、今回の活動の醍醐味でもあるエスペランサでの体験は、非常にインパクトの強いものでした。水道も電気も無い環境の中で生活している村人達の姿を見て、第一印象は正直「かわいそうだ」「この生活は辛そうだな」と思いました。
しかし、子供達との交流や、学校建設の労働奉仕など行い、村での生活を送ってみると、夜空に広がる多くの星、大自然との共存や川の恵み、人々のやさしさ、単純な生活から生まれる、ゆっくりとした時の流れなど、決して先進国では感じる事の出来ない事を感じて「今まで、こういう事を味わえなかった私の方がかわいそうだったのではないか？」などとさえ思った。
更に、絶え間なく飛び交う、子供達の笑い声を聞いている内に、逆に自分達が元氣付けられた。

レダにおいても、多くの体験と驚きを感じる事が出来た。開拓作業の基礎である、ヤシの木を斧で切り倒す作業の辛さ、魚釣りにおいて、釣り人の憧れの魚である「ドラド」を釣った時の感触など全てが、自分の宝物になったと思う。言葉の壁には歯痒い思いをした為に長い人生においての大きな課題となった。
今回のこの経験が、自分の人生においてプラスになるのは間違いない。そしてこの旅をサポートしてくれた全ての人に感謝したい。」

石原圭太郎（大学三年）

『エスペランサは僕にとつて、あまりにも特別な場所となつた。僕の魂の一部を、エスペランサに置いてきたような気がする。今、僕の左腕にはエスペランサで子供から買った腕輪がかかっている。この腕輪をみる度に、僕はエスペランサでの時間へと舞い戻る。エスペランサへ向かい、パラグアイ川を溯る時、わずかな不安を抱いていた。村人達は、自分達のような外から来た人間を受け入れてくれるのだろうか。子供達は素直に心を開いてくれるだろうか。しかし、他のどんな理由でもなく、僕とエスペランサの人々が、家族だからその地へ訪れ、奉仕するのだ、ということを思い、決意し直した。初めて会つたエスペランサの子供達は無条件に可愛かつた。透き通るような目でこちらを見つめていた。大人達は少し不思議そうな表情だったが、あいさつをすると笑顔で返してくれた。すぐに打ち解け、彼らと仲良くなることができた。それが素直に嬉しかった。

学校建設の労働奉仕は想像を絶するものだった。土台となるコンクリートを打つ仕事だったのだが、体が壊れそうになりながら、ほとんど気力で乗り越えた。それを通して、現地の労働者達とより深く交わり、心を通わすことができた。辛い労働奉仕を成し遂げることができたのは、メンバーとのチームワークとそれ故だと思つた。日中は40℃を越える環境の中で働き続ける彼らの体力と一生懸命さに、心を打たれた。しかし、最も心を熱くさせるのは、子供達である。彼らに少しでも笑顔で接していけば、満面の笑みで応えてくれた。あまりにも純粹で偽りのない彼らの笑顔に、もうノックアウトである。僕達の周りにはいつも子供達が居た。それで、どんなに労働で疲れている時でも、底知れぬ力が湧いてくるのだ。普段ならあの過酷な労働の後には間違ひなく崩れ落ちると思うのだが、僕は男の子達とサッカーをやつて走り回つていた。縄跳びや折り紙、日本語講座などを通して、子供達と深く深く交わつていった。折が紙の時など、折つて欲しいと懇願して僕を取り囲む彼らのあまりの可愛さに、2本しか無い自分の手に悔しさを覚えた程だ。彼らは僕の弟、妹達だと思ふ。エスペランサを訪ねる時、村の人々は僕の家族だと頭で思つていた僕は、最後にはいつまでも一緒に居たい、紛れもない本当の家族の關係を感じていた。

エスペランサで過ごす中で、僕は生涯をここで過ごすことも構わないと真剣に思つた。むしろここに残りたいとも思つた。ずっとここで、労働者達と汗を流し、子供達の笑顔と共に、彼らを見守りながら、美しく雄大な自然に育まれて生きよつと思つた。どれだけ彼らの心が清く美しかったら。為に生きるということを自然体で行つていく彼らに、何度も感動した。

エスペランサの人々は、人間は素晴らしいと、僕に教えてくれた。教育分野を自分の使命と考えている僕だから、やはり教育は、子供達の持つている。素晴らしい本性を育てて伸ばしてあげることが重要だと、100%の確信を得るに至つたのである。それを感じた瞬間、どれだけ神様に感謝したか分らない。僕はこれから教育において、新しい出発をしようと思つた。

重広貴美（国際關係学科三年）

まず最初にレダに来て感じた事は、「今まで広がっていた森林の中に別世界が出てきた！」ということでした。アスンシオンからレダまでは本当に遠くて、よく、こんな離れた所にこんな所を作つた……という思いでした。

私のこのプロジェクトに参加した一番の目的、エスペランサ村での活動は、私の心の中に潤いをもたらしてくれました。今までとは比べものにならない生活が目前に広がっていました。それは、生活環境の違いのショックもありましたが、子供たちの笑顔の輝きのすばらしさに対する衝撃もありました。どんな子でも、目が合つて、こちらが笑いかけると、すごい笑顔を返してくれました。日本で子供に笑顔を向けたら、まずお母さんがこちらが変なんだと思つて、遠ざけてしまいます。どんな子でも、名前を聞く前から、私の大切な妹のように感じました。

「この子たちの笑顔を一生守りたい。」という思いにかられました。エスペランサの村に住む子供たちは、全員がまるで一つの兄弟姉妹ようでした。誰の弟、妹であつても、小さい子が困つていたら助けてあげ、上の人がいたら兄、姉として慕つ。本当にすばらしい關係でした。

日本の犯罪の増加の原因が個人主義によるものだとよく言います。目の前にいる人は自分とは全く關係のない人。だから、殺しても、傷つけても別にかまわない。この思いが多くの子少年犯罪を生み出してきています。このエスペランサ村の關係がどれほど大切なのかということを感じ知らされました。

エスペランサ村の子供たちとの別れは本当に苦しいものでした。私の大切な妹と引き離される思いでした。いつまでもその笑顔を、その兄弟姉妹のような關係を失わないで欲しい。そう祈るより他はありませんでした。

レダに帰つてきてからは、多くの楽しいスケジュールが用意されていました。プー、馬車、乗馬、釣り、植樹、奥地開拓体験……etc.

しかし、どのスケジュールに居る時も、エスペランサにいる子供たちがどうしているか考えてばかりいました。自分自身が初めての体験ばかりだったので、すごく嬉しかったのですが、あの子たちならどんな喜び方をするのか？ と考えると、心が踊りました。

レダでの経験、それは全てが私の人生を大きく変えるものでした。ここで得たもの、感じたものはいつまでも失いたくない。できることなら、レダやエスペランサに住みついて（笑）共に生活したい！ そう思うようになりました。確かにこの地は蚊も多く、昼間はとても暑くて、苦しいこともあります。しかし、この辛さなんて、吹き飛んでしまうくらい笑顔があります。レダ、それは奇跡の地、希望の地、愛の地、夢の地、そして限りなく広がる地（土地開拓の意味でも（笑））でした。

最後に、このプログラムを用意してくださいました多くの先生方に心から感謝い